

北澤 豊雄 『混迷の国ベネズエラ潜入記』（出版社：産業編集センター、2021）



南米随一の産油国として繁栄していたベネズエラ。しかし、長引く政情不安や経済政策の失敗により、国民は貧困に苦しみ、日常的に犯罪が発生する南米最貧最恐の国になってしまった。すでに「破綻国家」とも言われているベネズエラの本物の姿を見るために、著者は身の危険に晒されながら三度にわたってこの国に潜入する。果たして、著者は何を目撃するのか。新進気鋭のノンフィクションライターが挑んだ限界ギリギリの冒険紀行。

【目次】

- 第1章 記者たちと国境へ
 - 第2章 首都カラカスを歩く
 - 第3章 三度目のベネズエラ
 - 第4章 刑務所にいた日本人
 - 第5章 コロンビアへの脱出
- 〔付録〕 野獣列車を追いかけて

北澤豊雄(きたざわ・とよお)

1978年長野県生まれ。ノンフィクションライター。帝京大学文学部卒業後、広告制作会社、保険外交員などを経て2007年よりコロンビアを拠点にラテンアメリカ14カ国を取材。「ナンバー」「旅行人」「クーリエ・ジャポン」などに執筆。著書に『ダリエン地峡決死行』（産業編集センター刊）。

本書は、体当たりのベネズエラ調査ルポです。筆者は、ベネズエラ問題研究者でもなく、ベネズエラ問題専門のジャーナリストではありません。コロンビアに在住して、ラテンアメリカを訪問して旅行記を書いている作家です。

著者の関心は、日本で伝えられる、ベネズエラが破綻した国家であるという報道の中で、ベネズエラのプロサッカーの試合が行われていることが腑に落ちず、その理由を現地で見きわめることでした。

皆さんも良く目にするでしょうが、筆者は、このようなニュースを読んでいました。

《南米のベネズエラで今、多くの人が生きるか死ぬかの瀬戸際にいます。食料も薬もなく、骨と皮だけになって衰弱する人たち。街では電気も水道もストップしました》朝日新聞WEB「南米一豊かな国に起きた異変 ベネズエラのいま」（二〇一九年六月二十四日）

《ベネズエラという国の経済が破綻した。二六八万%というとてつもないハイパーインフレによって、国民はモノが一切買えなくなり、人々が蓄財してきた資産は一気に無価値となった。その結果、とてつもない数の人々が国外に逃げ山している。吊略)食料やトイレットペーパー、紙おむつ、薬などのあらゆる物資が不足し、混乱を極め、略奪と殺人が頻発するなど、治安が極めて悪化しているという。水道・電気などのインフラの供給も度々ストップしている》現代ビジネスWEB「ハイパーインフレで地獄と化したベネズエラ、そのヤパすぎる現実」（二〇一九年七月十五日）016頁

「曰く、食糧と薬がなく一般市民が路上のゴミ箱を漁っている。曰く、ベネズエラは痩せ細った人ばかりで飢え死ぬ人が続出している。曰く、略奪と殺人が横行して無法地帯になっている。曰く、インフレ率が一六〇万%に達して現地通貨のボリバルは価値を失い経済は破綻。その結果、四〇〇万人もの人々が国を脱出している」。021-022頁

しかし、筆者は当然の疑問をいただきます。

「とはいえ、ベネズエラのプロサッカーリーグはこうした影響で試合の延期はあるもののリーグ戦の中断は一九五七年のリーグ設立以来、一度もない。四〇〇万人もの人々が国外に脱出して無法地帯になっているのであれば、サッカーどころの話ではないのではないか。いったいどうなっているのだろう」。 (以下、下線はすべて評者) 022頁

では、実際に北澤氏が見た実景を、ルポに従い見てみましょう。

筆者は、2019年8月、コロンビアで、取材アシスタントとして、コロンビア地方紙の若手記者フリオと契約し、西南部のメリダに、コロンビアのククタから入国します。そこで、次のような光景を目にします。

「国家破綻寸前で食料がなく停電が多いと報道されている国で享楽にふける若者がいるとは思っても寄らなかつた。そこら中に飢え死に寸前の人々が転がっていると思っていたのだ。

私たちは暗い階段を手探りで上って四階に出た。円形のレストラン街は真ん中に丸テーブルが二十個ほど無造作に置かれ、その回りにレストランが連なっていた。が、営業しているのはピザ屋と軽食屋とカフェの三店舗だけだった。中央の客席には三組ほどの客がい

るだけだった」。065 頁

同行のフリオが、言います。

「ベネズエラはイメージとずいぶん違うじやないか。そう思わないか？ まさか若者がお洒落をしてディスコに行ってるとは思っても寄らなかった。もしかしたら報道には特別な意図があるのかもしれない。ベネズエラに関する悪い報道の大半はアメリカとコロンビア発信が多い。アメリカは反米のマドゥロ大統領を追い出して石油の利権を確保したいし、コロンビアは親米だから追従せざるを得ない。そういう思惑のもと、悪い部分だけ切り取られて報道されているような気がするんだ。それも、かなり大袈裟にね」

食事が運ばれてきた。が、私は少し摘まんだだけで二人にやった。フリオが続けた。

「とはいえ、メリダの一部を見ただけだから、ともかく明日、朝から街を回ろう。カラカスの事情はもっと違うだろうし。ただ、それにしてもイメージと違ってびっくりだな」。

066 頁

著者は、さらにメリダを見て回る。

「メリダの市街地は教会の高い尖塔を中心に赤茶けた瓦ぶきの屋根が軒を連ねている。奥に行くにしたがいシャッターと重々しい格子扉が降りている景色が増えて行くものの、繁華街は活気があった。一見する限り人々の顔に悲壮感はなく、物乞いもいるにはいるがどこにでもあるごく普通の小都市だ。目抜き通りの携帯電話を売る店の前には人が多く、細身のジーンズにカットソーの大学生風の女子たちがおしやべりに興じていた。繁華街のやや外れにあるレンガ調の大きなスーパー「ガルソン」でタクシーを降りた。

入口に足を踏み入れて私たちは息を呑んで立ち止まった。自動ドアの近くには十二個入りのトイレットペーパーが七段、その向こうには三キロ袋の米が満々と三十段ほど積み、飲み物の陳列の一両には I、五リットルのペプシコーラだけがこれみよがしに四段分、およそ二〇〇本がぎゅうぎゅうと詰まっていた。予想に反し、食料も日用品も薬もたっぷりあった。

値段は例えばトマトが 1 キロ約一一〇円、米が 1 キロ約八十円、安いトイレットペーパーが二個で約一三〇円である。メリダに関していえば、もはや報道とはずいぶん違うことを確信しつつあった」。068-069 頁

しかし、アシスタントの二人が、メリダで強盗に会い、取材の継続を断念、筆者は、コロンビアに戻ります。そして、今度は空路でカラカスに向かい、カラカスで日本人学校の管理人として勤務しているオマルとアシスタント契約を結びました。筆者は、パトロンであるコロンビア在住のレストラン経営者、高橋社長に連絡を取ります。

「日中の街の様子が普通だって？ 北澤君、本当に街を歩いたの？」

高橋社長は眉根を寄せて続ける。

「だってベネズエラは四〇〇万人近くの人々が食えずに国を出ているんだよ。月給は七ドル前後でスーパーには物が無い。だから追い剥ぎ強盗が日中も跋扈している。俺は君たちは絶対に襲われると確信していた」

普通は元部下を心配するものだが、襲われることを期待する元上司も珍しい。

「それが社長、スーパーには物がたくさんあり、飲食店も開いていました。繁華街の外れの方に行くとシャッターが閉まっている店も多いですが、一見すると街は至って普通でした。ただ停電は六日間の滞在で二回、夜は街灯がついてないところが多いので怖かったです」。090 頁

オマルが、日本でベネズエラについて同報道されているか筆者に聞いてきます。

私は素直に答えた。

「食料がなく国民は餓死寸前。無法地帯になっているため、四〇〇万人近くが国を脱出している」と

オマルが含み笑いを洩らした。

「一緒に街を歩けば分かりますが、半分は本当で半分は嘘です。ジャーナリストたちはベネズエラに来ないまま記事を書いている。だから、まるで戦争でもしているような国の扱いを受けている」

「とはいえ、日本人学校は二月で閉鎖になっている」

「ええ、最大の理由は一月末の米国からの経済制裁、アメリカへの石油輸出禁止です」。アメリカは反米のベネズエラに段階的に経済制裁をおこなってきたが、国の基幹産業たる石油の輸出禁止は大打撃になることが予想された。結果、ベネズエラは外貨収入の大半を失うことになる。ベネズエラの在留邦人の多くがこれを契機に帰国した。094 頁

筆者は、さらにカラカスの街を散策しながら、取材の本題に問いかけます。

「とはいえ本当に国家破綻の状態であれば国内のサッカーリーグは中断しているはずだ。隣国コロンビアでは麻薬戦争が激化して内戦が最高潮に達した一九八九年、国内のリーグ戦を中断している。

オマルにそれらを告げると、彼は笑みを浮かべた。

「だから言ったでしょう。報道は半分は本当で半分は嘘だと。ただ、おおむね二〇一六年頃から今年（二〇一九年）の三月ぐらいまでの間は、スーパーに物がないう時期がありました。あっても長蛇の列が出来て何時間も並ばなくてはならなかった。私も七、八時間、並んだことがあります。それが国際ニュースでクローズアップされたわけだけど、その間、ずっと物がなかったわけじゃないんです」

カラカスの高級日本食レストランに長らく勤める中年の女性は、こともなげにこう言い放っている。

「私は並んだことなんて一度もないです。自分のいる国がそういう状態にあることを、テレビのニュースで初めて知りました」。124-125 頁

しかし、その後、筆者は、行きずりの若い女性にひっかかり、取材費を盗まれ、取材を断念し、ベネズエラを陸路出国します。

国外への移民が四〇〇万人というのは異常だが、前述したように私はベネズエラから陸路で出国し、多くのベネズエラ人と共にコロンビアの入国審査に並んでいる。その日はあ

いにくいつもより人が多く十二時間ほど並んだが、彼らは必ずしも移民が目的ではなかった。一時的な買い物、もしくは商用で出国する人も非常に多く彼らも移民の数字にカウントされてしまっている可能性はきわめて高い。したがって実数はその半分くらいではないかと思う。

私はオマルに、一般庶民の感覚として、現在のベネズエラの問題は何だと思えますか、と問うと彼は間髪入れずにきっぱりと答えた。

「国民の収入が極端に低いこと。停電が多いこと。政府の動向が不透明で情報が出てこないこと」。 131 頁

そして、筆者は、またまた高橋社長の命で、空路、三度目のベネズエラ入国を果たします。そこで、見たカラカスの風景を、筆者は、下宿のおばさん、露天商のディナに聞きます。

「路上でネスティを売って四年ほどになるということですが、ここ数年、何か気づくことはありますか？」

「みんな靴や服を買わなくなったねえ。ベネズエラ人はお洒落なのにみんな買えなくなっているんだよ。それだけ稼ぎが減っているということ。毎日ネスティを買ってくれる中流層の会社員も一年ぐらい同じ靴を履いている。今までのベネズエラではあり得なかった」。

おりしもテレビのニュースはクリスマス商戦の靴屋の特集だった。街でもっとも安い靴は約二三〇〇円だという。これに対してリポーターが路上で感想を聞いて歩くと、誰もが異口同音に「高い」、「買えない」と答えていた。もっとも、後日、ディナと街を歩くとこれより安い靴はいくらでもあったのだが。

テレビのチャンネルを切り替えると、「グロボビジョン」というニュース番組（保守系）に目が止まった。先日起きた地下鉄の脱線事故について美人キャスターがコメントーターのエコノミストに感想を求めると、その男性は最後にこう付け加えた。

「それから、この国は停電の問題が一向に改善されない。まずは国の電気を回復するべきだ」

私は驚いた。ベネズエラは独裁国家と形容されることがある。政府批判のニュースがゴールデンタイムに流れているとは思わなかったのだ。 161-162 頁

北澤氏は、偏見をもたずに、自分の頭で見たことを整理して、論理をたどり報告しています。研究者やジャーナリストの中には、一定の先入観をもって国際ニュースを選択し、自己の主張の基盤とする人がいますが、それらの態度とは異なるものです。

この北澤氏のルポは、やはり 2019 年にベネズエラを訪問し、見分を報告していただいた、宮本真紀子さん、松野哲郎さんのルポとも同じ内容です。

(2021 年 3 月 30 日 新藤通弘)